
Hide-and-Seek

稀春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Hide-and-Seek

【Nコード】

N9901W

【作者名】

稀春

【あらすじ】

目が覚めた時、少年は並行世界に跳ばされていた。かつて少年がいた世界とよく似た世界。——でも、その世界の人は傷つけられることも殺されることもなかった。ただ例外として、少年のように並行世界から跳んできた者だけは人を傷つけることができた。そんな世界で少年は一人の少女と出会い、日々を生きていく。

この小説は同人サークル「Melodious Combat」のHPでも公開しています。

Hello, world

時間が解決する、という言葉が嫌いだった。苦しみに耐えて、いつかその痛みが癒える時が来るのを待つことが。行動を起こせないのを言い訳にして、ありもしない奇跡に縋っているように思えて。待つのではなく、自ら進みたい。一秒でも、一瞬でも、その時間をしっかりと噛みしめて。

——時間は何も解決しないのだから。

——叩きつけるように、歌っていた。

狭いステージ。照明は肌を焦がすほどに熱い。客席を見渡せば、狂ったように手を突き上げ、頭を振り回す連中。

——泣き叫ぶように、歌っていた。

ドラムの音が、ベースの音が、心臓に突き刺さる。それを頼りに弦を掻き鳴らす。音の洪水。ロック。

——求めるように、歌っていた。

どれだけ歌っても、何かが足りない気がした。埋まらない心の隙間。……求めている？ 何を？ 誰を？

「く……。……くん」

「……」

頭上から声が降ってきて、くおんてる久遠輝はまどろみから覚めた。

「やっと起きましたか、久遠」

眩しさに顔をしかめながら薄目を開けると、そこには一人の少女が立って輝を見下ろしていた。

「またこんな所で寝ていたのですか？ あなたは」

こんな所、と言われて自分がどこで寝ていたのかを思い出す。マンションの屋上だ。ちよつと休むため横になったつもりが、いつの間にか眠りに落ちてしまったようだ。

「太陽が良い具合に当たるんだな、これが」

横になったまま、言い訳を試みる。五月の日差しは柔らかで心地良いのだ。

「……風が強いです」

「おかげで寝苦しくない」

輝のどこか気の抜けるような言葉に、少女――かしゅわかな華秋和奏は腰程まで伸びた長い髪を抑えつつ、小さくため息を吐いた。

「そうですか。まあ、どうでも良いですが。……それより」

「ん？」

ばつさりと話を切られ、何か用事でもあったのかと思い輝は身を起こした。目が合う。端正な顔つきに透き通った瞳。体つきは華奢でいて人形のような、と輝は日頃から思っている。そして何よりも目を引くのは長い銀色の髪である。太陽の光を浴びて、幻想的に輝くその髪を見ていると、彼女が物語に出てくるお姫様のように思える。

思わず見とれていた輝に和奏が告げた。

「時間、大丈夫ですか？」

まさか、と思いつつも輝は時計に目をやり、そして絶望した。

「うお！ バイトの時間、過ぎてる！」

「やはり、そうですよね」

取り乱す輝に対してあくまでも冷静な和奏。そもそも和奏は感情をあまり顔に出さないから分かりづらいのだが。

「必要な荷物は準備しておきました。今更焦っても遅刻には変わりないので、せいぜい死なない程度に急いで行ってください」

慌てて立ち上がった輝にバイト用のリュックが手渡される。

「サンキュ！ んじゃ行ってくる！」

感謝の言葉を投げつつも輝の足はもう動き出していた。死なない程度に急いで。

久遠輝はフリーターである。ニートではない。何故なら親からは金を一円も貰っていないからだ。そして輝はアルバイトで生計を立てているからだ。

中学を卒業したあと高校には進学せず、かといって職にも就かず、ただ明日を生きるためにバイトで生計を立てている。こんな自分なんかとまともに付き合ってくれる人は、和奏と、輝と同じく中卒である同級生の男ぐらいのものだ。

とにかく、久遠輝は年齢十八にしてフリーターの男だった。

その後、当然の如く輝はバイト先ではこつ酷く叱られた。それでも和奏が起こしに来てくれなかったらもつと処分は重かっただろう。今のバイトは時給が良いから、やめさせられるわけにはいかない。やめさせられたら、金がなくなる。金がなければ、飯が食えない。飯が食えないと、生きていけない。——簡単な式だ。

そのバイトの帰り道で、コンビニ帰りと思われる和奏を発見した。

「よ、和奏。買い物か？」

「久遠。ええ、夕飯を買いに」

後ろから声をかけると、長い髪を翻して和奏が振り向いた。横に並んで歩くと、なるほど、ビニール袋の中には弁当が入っている。

「相変わらず料理は苦手なんだな」

「料理をする必要性が感じられません」

少しだけムスツとした返事が返ってくる。心なしかいじけているようにも見えて、輝はなんとなく微笑ましい気分になった。表情の

変化は薄くてもちゃんと彼女には感情があり、そして輝は時折見せる彼女の表情を楽しみにしていた。

「あなただって、料理はしないでしよう?」

「……そりゃそうだ」

和奏の反撃に輝はたじろぐ。飯は最低限食えれば良いと思っているため料理はロクにせず、和奏と同じくコンビニやレトルトのお世話になっている身だ。

「一人暮らしは大変だな」

「お互い様、です」

和奏は輝と同じマンションの住民で、一人暮らしをしている。輝が二年半程前に引っ越してきて以来、色々縁があって今でもこうやって偶に会って話をする仲である。

それきり和奏は口を閉ざしたため、自然と会話が途切れた。和奏は無口なタイプなため、こういった会話のない時間が二人にはよくある。気心の知れた二人の、無言が心地良いというシーンは定番だが、輝にとってはそんな大げさなものじゃなく、ただ真っ白で居られるという気分である。気負いとか、遠慮とか、配慮とか、そんな余計な物が削がれたような。

結局これを心地良いって言うのかな、と輝は思う。

「……」

そして、そんな静かな空間では色々なことをぼんやりと考えてしまふものだ。

街灯がぼんやりと照らす道を歩く、同い年の二人。一人は現役の学園生。片や、現役のフリーター。

我ながらシニールな光景かも、と自嘲気味に思う。

「……何か?」

「うん?」

「いえ、何かくだらないことを考えているような目をしていたので」「くだらないと断定かよ。……ただ、和奏は学園生なのにさ、俺はフリーターだなあって思っただけ。実際、端から見たらどうなんだ

ろう？」

「くだらない」

気持ちの良いくらいあっさりと一蹴される。

「他人の目など気にするような性格ではないです、あなたも、そして私も。そんなことを考えている暇があったら、もつと有意義な時間の使い方をしてください」

「何、拗ねてるんだよ……」

「拗ねてなどいません。あー、くだらない、くだらない。誰か面白い話を聞かせてくれないでしょうか」

夜空を見上げ手を後ろに組みながら、和奏は何ら声色を変えることもなく言う。

「めちゃくちゃ棒読みだな。それじゃ話を変えて、と。昼間はないがとうな。おかげでクビにはならなかった」

「そうですか、それは幸いでしたね」

「ああ」

「……………」

「……………」

「……………あなたに面白い話を期待した私が馬鹿でした」

「ああ」

輝と和奏の関係はいつだってこんなもんだ。……でも、そんな関係が心地良いつて言うことなのだと輝は思っている。そしてきつと和奏もまたそうなのだ。

翌日。バイト帰り。マンションのエレベーター内。

輝は俄かには信じがたい状況に直面していた。

「ありえねえ……」

エレベーターのボタンが一つ増えていた。

「エレベーターのボタンが一つ増えている」

狭い空間の中で、思ったことを口に出して確認してみる。紛れも

なくボタンは一つ増えていた。

一、二、三、四、五、六、七。

自分の住む部屋の階が六階で、このマンションは六階建て。つまり最上階だ。ここは日本であってヨーロッパや台湾じゃないのだから、日本の感覚で七階のボタンを押すと六階に着く……なんてことはない。それにも関わらず、さも「最初からここにありましたか、何か？」とでも主張するかのように、六という数字の上には七と書かれたボタンがあった。

屋上へ直通するように改修でもされた。つまり、七〃屋上ということ。それが一番現実的かもしれないが、輝はこの屋上を良く利用している。あそこへは階段でしか行けないし、仮にそのような工事を行ったとしたら気づかないはずがないのだ。

「マジありえねえ……」

どこの若者だ、と自分自身に突っ込みを入れたような感想しか漏らせなかった。

もちろん、わざわざこんな正体不明のボタンを押さずに六階へと行っても良いのだけれども、しかしだからと言って全く興味がないわけではない。

そう。ひよつとしたら、ずっとこういった刺激を求めていたのかもしれない。

変わらない日常。何か足りない気がする日常。——それをぶち壊すような突拍子もない出来事を。

過去に一度挑戦して、失敗した。自分自身が壊れてしまったのだ。もうこのような機会はないのだと諦めかけていた。

「時間は何も解決しない」

それが輝の心情だ。待つのではなく、自ら進め。

「……………行け！」

そして輝はボタンを押す。押した。押してしまった。

七。——当ても、果てもない、行き先を。

動き出したエレベーターは、普段と何も違いは見られない。

そしてそのまま六階を――通過した。

「……えっ！」

その瞬間、エレベーターが激しく揺れ始めた。横揺れ、続いて縦にも。

「うわっ……！」

故障か、大地震か。どちらにしても異常な程にエレベーターは揺れ続ける。……しかし、その二つ予想はどちらも不正解だった。

それを裏付けるかのように、最大の変化が、来た。

――何が来たのか？ 端的に言うならば“加速”だ。

「ぐああああ！」

空気を引きちぎりながら、エレベーターは上へ上へと加速する。

明らかにマンションの高さを越えても尚、そのスピードは微塵も緩む気配がない。

――加速する。

凄まじい大きさの重力に押さえつけられた輝は、あっという間に立っていらなくなり、床に張り付くように四つん這いにさせられた。

――加速する。

何なんだよ、これはっ！

そう叫びたかった。いや、実際叫んだのだが、声は轟音と圧力に掻き消され音にならなかった。

――加速する。

やがて口を開くことさえ叶わなくなる。文字通り身動き一つ取れない。

……どれほどの時間が過ぎたのだろうか。輝の思考の端には諦念が生まれつつあった。助からない、という。最早上がっているのか飛んでいるのか、それすら分からない。

《俺は、お前に、謝らない》

不意に、聞き覚えのあるような声が聞こえた。とても身近で耳にしているような声。

その声を捕える感覚器官は、しかし、聴覚ではない。直接頭の中に語りかけられているような気がする。

《大体、来るのが遅すぎなんだよ》

何のことだ……。そう言おうとしたが、相変わらず音にはならなかった。

《もう、待たせるな。会いに行け。その権利を持つのはどの世界にもただ一人しかない。俺じゃない……。ましてや他の誰かでもない。お前だけだ、久遠輝。お前が会いに行くんだ》

この声をどこで聞いたのだろうか、思い出せない。この男が何を言っているのかも分からない。意識が酷く歪む。

《Hello , world》

——そこで輝の意識は途絶えた。落ちていく。

「プロローグ Hello , world 完」

Hello, world (後書き)

閲覧して頂きありがとうございます。

更新ペースは一週間に一度を目標としています。

これが処女作なので、至らない点も多くあると思います。
ご意見やご感想、ご指摘などを頂けたら幸いです。

辿り着いた場所で

「かはっ……」

宇宙のただ広い空間を彷徨っていた意識が体に戻るような感覚を覚えて、輝は目を覚ました。

「……っぐ」

途端に頭痛が襲ってきて、頭を押さえようとする。しかし、その手が上手く動かない。まるで他人の体になってしまったかのように、神経が通っていない心地がする。

暫くするとようやく感覚が戻ってきて、輝は身を起こすことに成功した。

「ここは……屋上か？」

目に飛び込んできたのは見慣れたはずの景色だったが、どこか違和感を覚える。——空が、赤い？ 輝は慌てて立ち上がり手すりに駆け寄った。

「何が……どうなってるんだよ……」

絶句した。

異常。一言で表すならばただそれに尽きる。

街が、燃えていた。

街が、壊れていた。

何よりもまず大地震が起きたことを疑ったが、そうではないと即座に理解させられる。——それは一発の銃声。そして吹き飛ぶ屋上の扉。

振り返ることさえできない中、足音が近づいてくる。

「手を上げなさい」

凜とした女性の声。それに輝は背を向けたまま、のろのろと両手を上げた。

「まさか……一般人？ 何でこんな所にいるの？」

「それより俺はここが本当に日本なのかを聞きたいよ……」

「質問をしているのはこっちよ。……ゆっくり振り返って。妙な動きを見せたら容赦しないわ」

「……」

その命令に逆らえるはずもなく、輝は両手を上げたまま後ろを向く。

そして、振り返った先にいたのは

「嘘……」

何故か目を丸くした、一人の少女だった。

——風が強い、と場違いにも輝は思った。ここはいつだってそう
だ。少女の栗色を軽く帯びた髪が揺れる。二つに縛った後ろ髪が横から顔を出す。

「何で……あんたが」

強気そうな瞳に驚愕の色を浮かべながらも、銃口はピタリとこちらを向いている。年は輝と同じくらいだろうが、黒光りする銃は不思議なくらいに彼女に似合っていた。

「おい、できれば状況の説明くらい頼む。このまま死ぬのはあまりに救われん」

輝が声をかけると、少女はハツとした表情を浮かべ銃を握り直した。

「状況って……テロリストの攻撃を受けているのよ。避難命令も出ているでしょ！ 何であんたはこんな所にいるのよ！？ バカなの！？」

「なっ……！」

訳の分らないことをまるで当然の如く言われ、ついに輝の混乱はピークに達した。

「……そんなの初耳だ！ 何だよテロリストの攻撃って！ ってか初対面のヤツに馬鹿呼ばわりされてたまるか！」

「っ！」

一瞬、少女の表情に怒気ではない何かが浮かんたような気がした。しかし、少女は銃を下ろしながら背を向けてしまったため、それが

何かは分からない。

「おい、お前……？」

「お前じゃない。あたしの名前は風流瑞希^{なづるみずき}よ。……ついてきて。あんたをシエルターまで連れて行くわ」

有無を言わせない調子で少女は歩き出す。その後ろ姿からはもう何も読み取れない。

「早く。まだここは危険よ」

どうやら選択肢は一つのようなのだ。

「……久遠輝だ」

輝は覚悟を決め、少女——風流瑞希の背中を追った。

「なあ瑞希」

「……普通いきなり名前呼ぶか」

「いきなりでもないだろ。俺には聞きたいことがある。そして、それは全く解決してない」

「そういう意味じゃない。馴れ馴れしいと言っているのよ」

「……」

そっちか、と輝は言葉を詰まらせた。馴れ馴れしい——いきなり名前で呼び捨てだからだろうと気づく。

輝はマンシヨンの階段を下りながら、目の前を先行する少女の背中を見つめた。

言われてみると確かに、自分は彼女に対して警戒が薄い気がする。銃口突きつけられて、突然妙なことを言われて、しかも軽く拉致されて。割と……というか、かなり理不尽な扱いだ。警戒して当たり前なほどに。

——でも、と輝は思った。二つに分けて縛られたセミロングの髪から華奢な肩が見え隠れする。その背に言葉を返した。

「なんとなく、そっちの方がしっくりきたからだと思う。……不快だったなら謝る、ごめん」

「……別に良いわ。あたしに強制する権利はないし。好きにすれば良い」

「ああ。ありがとう。じゃあ改めて……瑞希、聞きたいことがある」
「何？」

「色々あるが、とりあえず、いつから日本の銃刀法は改正されたんだ？」

まずは手近なところからと思い、瑞希の手に収まっている銃を指差し、輝は尋ねた。

「何よその法律？ そんなの知らない。ってなわけで、あたしはあたしの中の法律に従うわ。銃オツケー」

「フリーダムかつ！……まあ良いや。ひとまずそれは置いておこう。で、俺、エレベーターに乗ってからここ数分の記憶がないんだけど、いつの間に街が火の海になっているのは何でだ？……かなりヤバいだろ」

一体どれだけの被害があるのかなんてのは知らない。それでも、輝にだって安否が心配な人はいる。できるのならば、一刻も早く確かめたい。

「さっきも言ったじゃない？ いやいよお隣の国が牙を向いたのよ。さんざんニュースにもなつてたけど」

そうだったろうか、と疑問に思い輝は記憶を掘り起こそうとするが、そもそもニュースをあまり見ないから分かるはずがなかった。「どうやら本当に知らないようね。その無知さには呆れるしかないわね」

自分の顔にはその様子がありありと浮かんでいたらしい。本当に呆れた調子で嘆息する瑞希に、輝は少しムツとして言い返した。

「じゃあ、何でお前はここにいたんだよ？」

「あたしがシーカーだからに決まっているでしょ。九割はこちらが制圧したけれど、まだ残りの一割は息を潜めているわ。今戦わないでいつ戦うのよ」

シーカー？ また耳慣れない単語だ。自衛隊の部隊の名前か何か

だろうか？

ひとまず、ほとんどこの戦闘が終わりかけている点に輝は安堵した。

「こつちこそあんたがあそこにいた理由を聞きたい。避難放送にも爆撃音にも気づかないなんて……はつきり言つて異常よ」

「……正直、俺にだって良く分からない。バイトの帰りにエレベーターに乗ったところで記憶が途絶えているし。……ただ、気づいたらあそこにいたんだ」

「……怪しい。あんた本当にテロリストの一味じゃないでしょうね？」

瑞希は銃をこちらに向け、誘うように軽く上下に振る。

「違う。それを言うなら、お前だって俺と大して年変わらないのに、そんな物騒なモノを持ってるじゃねえか。怪しい」

銃がピタリと止まり、照準が輝の眉間に定まった。

「あんたと同じくらいの年だからってなめないですよ？ これでも実戦経験は両手で数え切れるくらいにはあるわ」

「と言われても、一から十って地味に範囲広くないか……って、実戦！？」

「そうよ、実際の戦闘。……略し方、合ってるわよね？ ま、別にいつか」

実戦を経験したと言う瑞希に、納得できる部分もあるかもしれないと輝は思った。彼女からは何か常人にはない、底冷えするような雰囲気を感じていたからだ。

「……！」

次に何を尋ねようかと考えていたところで、急に瑞希が足を止め、輝はその小さな背中につかっってしまった。

「急に止ま……っ！」

「馬鹿……！ 大声を出すな！」

顔だけ振り返り小声で怒鳴る瑞希。そこで輝は、何やら良からぬ事態が発生しているのだとようやく気づいた。ゆっくりと柔らかい

背中から身を離し、何やら手元に集中している瑞希を覗き込む。

「電波の妨害が酷い。でも確かにこのマンション内のどこかに誰かがいる……」

ぶつぶつと呟き、瑞希は携帯のような端末をポケットに入れた。

「誰かって……誰だよ？」

「さあ？ 屋上で寝過ごしたわけではないことは確かね」

「ということは？」

瑞希は答えの代わりに銃を撃つようなフリをする。

「ええと、つまり、同じようにこちらの場所を掴み切れない……テロリストさん、とか？」

輝の言葉に瑞希は口の端を微かに上げた。

「寝過ごした割には優秀ね」

「ありがとよ。あと二回も寝過ごした言うな」

一度目はスルーしたのだから。しかも別に寝過ごしたわけじゃない、と輝は心の中でだけ反論する。

「とにかく、位置が判明しない現状ではこちらも迂闊に動けないから、暫くは様子を見るわ。少し黙っていなさい」

「……おい」

「何よ。黙りなさいって言ったでしょ」

「足音がする。数からして多分二人。場所はここから二つ下の階」

「え……」

「お前が誰かいるって言ったんだろ？……耳は良いんだ」

「耳が良いって……そんなレベルじゃない」

明らかに怒りを表した調子の声。全く、清々しいほど感情が素直に表れる人だと思う。

「気持ちとは分かんなくてもないけど、嘘じゃない」

瑞希は輝の真意を探るようにジッと瞳を見つめてきた。こちらも目は逸らさない。

「信じる」

数秒の後、瑞希はそう言うと、輝に先ほどの端末を手渡した。

「これから二手に分かれるわ。あたしがその二人組と接触するから、あんたはここに残ってそいつらの居場所を逐一あたしに連絡して」
そう言つと、瑞希は髪をかき上げイヤホンを自分の耳に差し込んだ。

「待てよ。それなら俺も一緒に……」

「足手まといよ」

「つぐ！」

ストリート、かつ的確な言葉に輝は閉口せざるを得なかった。自分分はヒーローじゃない。頭では理解していても、その事実を素直に受け入れることができるほど輝はまだ大人ではなかった。

「まあ、死ぬわけじゃないんだから気楽に構えていなさい」

言い残し、瑞希は猫のような身のこなしで階段を駆け下りていった。

大嫌いなこと

端末は既に設定されていたらしく、輝はそれを右耳に当てた。同時にもう片方の耳の全神経を研ぎ澄まし下の階に傾ける。

集中。余計な雑音は意識の外へと排除する。こぶになった糸を最速でほどくためにはどの糸を引っ張れば良いのかを見極めるような、繊細かつ集中力を多分に使う作業。

そして、輝の耳が必要な情報を捉える。

「瑞希、聞こえるか？」

「……聞こえるわ」

「二人組は何かを話し合っていて、まだ移動はしていないようだ。あと、このマンションはL字型に建設されている。で、こちらの階段からは遠い方の通路のどこかにいるはず」

「……こちらも確認した。間違いなくテロリストの一味ね。隙を窺って仕掛けるわ」

「ああ。また何か動きがあったら連絡する」

端末から耳を離し、ふと自分の手を見つめた。少し汗ばんでいるけど、こんな状況でも意外と冷静な自分もいる。今はその冷静さが残ることを祈るばかりだ。

『そろそろ仕掛けるわ。ヘタするとこのマンション吹き飛ばから、埋もれないようにだけ気をつけなさい』

「……いつ!? 埋もれ……って、それ以前の問題だろ!」

物騒な言葉に思わず言い返したが、それはあっさり無視された。

「っ!」

そして響く銃声。

「くっそ!」

恐怖。加えて、少女一人を危険な状況に追いやっていることへの憤り。……物音を捉えすぎる耳に銃声がガンガンと響き、こめかみを押さえた。

「一人っ！」

瑞希の勇ましい声が端末から聞こえてくる。次いで、三つ重なっていた銃声の一つ減った。どうやら一人倒したようだ。

「……っ！ 逃げる気か！」

不意に銃撃戦が止み、足音が遠ざかっていった。

「下か……？」

輝は踊り場から三階に下り、逆側に設置された非常階段に目をやる。

銃を抱えた男が一人、階段を駆け下りていく。そして、それに続いて滑るように階段を下りる瑞希の姿を発見した。

「逸れるわけにはいかないか……」

もう自分にできることはないかもしれない。そんなことは分かっている。しかし、ここで逸れても自衛の手段はないのだ。せめて迷惑にならぬように十分な距離を保ちつつ追いかけるのが最善だろう。

「……自分本意な考えだよなあ」

そこにあるのは自分が助かるための手段だ。そんな自分が嫌になる。

「でも」

そんなことをじっくり考えていられる余裕なんて、あるはずもなかった。

マンションのエントランスに辿り着く。視覚に注ぐ意識を最低限にし、ほぼ全てを聴覚に回して周囲を警戒する。

「うおっ！」

マンション前の道を足音が通り過ぎようとしてることに気づき、輝は集中を解くと咄嗟に柱の陰に隠れた。

「……さっき逃げてた奴か？」

陰から様子をうかがうと、背後を振り返りながら走っていく男が見えた。その視線の先には——瑞希の姿。

「いや……！」

違う！ アイツが見ているのは——瑞希の更に後ろ！

そこには銃を構え、瑞希の背中に狙いを定めるテロリストがいて、そして、それに瑞希は気づいていなくて。

——間に合わない。

そう思った瞬間には、輝の体は既に弾かれたように走り出していた。

「避けるおおおお！」

咆哮。瑞希が目を見開く姿が一瞬瞼に映る。

——間に合わない。

銃声。空気を切り裂き、飛ぶ鉄の塊。

——間に合わない。

「間に合ええええええつ！」

瑞希を突き飛ばし、射線上に割って入る。

——間に合った！

——間に合った？ それは、つまり？

「っ！」

自分が撃たれたということ……？

パツと鮮血が宙に散った。しかし、幸い肩を掠めただけで済んだようだ。物語とかでは度々見かけるシーンだが、実際にはこれだけで死んでしまいそうに痛い。肩を押さえてその場にしゃがみ込む形になった。

「……？」

静寂。追撃がないことに疑問を感じた。これは遊びじゃないのだ。自分はこんな無防備な状況なのに、銃声が止むのはおかしい。

輝は傷から目を離して周りを見渡した。

「……………」

何故か瑞希も、逃げていたテロリストも、撃ったテロリストも、目を見開いて自分を見ていた。この空間だけ時間が止まっているようだ。誰も身動きを取らない。

「な、何だ？ これ」

まるで……そう、化け物を見るかのような。そんな感じの、戸惑いと、畏怖が滲み出た視線が輝一人に浴びせられている。

「……………」

「……………！」

突如としてテロリストの二人が大声で会話を始めた。異国の言葉だったので、何を言っているのかは分からない。

そして――

「……………！」

彼らは何事か叫びながら輝に銃を向けた。それはまるで、完全に目標が切り替えられたような。彼らにとって何か予想外のことが起きたかのような。

輝はそんな目まぐるしい状況の変化に身動き一つ取れなかった。

「ちいっ！」

そんな中、およそ女の子発して良いレベルじゃないほどにイラついた舌打ちをし、瑞希は呆然と立ち尽くしていた輝の手を掴んだ。

「一旦退くわ……………」

輝にだけ聞こえるような声で言うと、瑞希は手を高く振り上げ、地面に手のひら大の何かを投げつけた。

強烈な噴射音。そして曇る視界。火災訓練で体験したような臭い。

――それは煙幕だった。

「行くわよ」

ぐいと手を引っ張られ、輝はその誘導に従って走った。どうやら瑞希には見えているらしい。テロリストが何かを叫んでいるようだ。だが、その声も次第に遠くなっていく。

――そうして輝と瑞希はその場から離脱した。

「って、そんなに簡単に行くわけないか！」

しかし、大通りから路地に入ろうとしたところで、ばったりとテロリストの一味と思われる人物と遭遇してしまった。

「……！」

出会い頭に発砲されたが、輝は瑞希に引っ張られるまま横っ飛びに転がってそれを避けた。近くに止まっていた車の影に潜む。そこでついに輝はその場に座り込んでしまった。

「あんたは、その路地に入って隠れなさい！」

瑞希は輝の耳に口を寄せてそう叫ぶと、銃を取り出し身を乗り出して迎撃を始めた。

銃が火を噴き、火薬の臭いが鼻を刺した。ここは非現実？

「……くそっ！」

情けないことに足が震えて動けなかった。まるでアクション映画の世界にでも入ってしまったかのような錯覚に囚われる。本当にアクション映画ならば良い。だけど、肩の痛みがその錯覚を否定する。言いようのないほどの恐怖。ここは現実。

銃撃戦の合間を縫って瑞希が一瞬だけこちらに目をやった。

「……大丈夫。死なせはしないわ」

たった一目で輝の状況を悟ったのか、彼女は敵を見定めたまま輝を安心させるかのように不敵な笑みを浮かべ言い放った。その横顔に恐怖を払われたような気がした。今なら走れる気がした。——立ち上がる。

「これを」

瑞希が腰のポーチから何かを取り出し、それを素早く輝に手渡した。おそらく先ほどの発煙手榴弾だろう。輝はそれを握りしめるとポケットに入れ、大通りから細い路地へと走り出した。

それに気づいたテロリストがこちらに銃を向けるが、
「行かせるか！」

瑞希の鬼気迫るような連射に阻まれ遮蔽物に身を隠した。

その間に輝はなんとか路地に入り込むことに成功した。

「……っはあ」

そのまま奥へと走ると、壁に手をつき大きく息を吐き出した。その両手が思い出したかのように震え出す。その手をぎこちなく動かし、服の袖を破いて包帯代わりに肩の傷に巻きつけた。

距離が離れたため銃声は微かに聞こえるだけになっている。それほどまでに遠くへ来ていたのか、と輝は思う。

「……」

ふと先ほどのマンションの時を思い出した。まただ……また自分は遠く離れた場所で銃声を耳にしている。

「これで、良いのかよ……」

知らず内に声が漏れていた。

これで、良いのだろうか？ 自分一人だけ安全な場所に隠れて。

怯えて。震えて。何よりも、瑞希一人を危険に晒して。……しかも、その少女は自分を助けようとしてくれているのだ。

自分だけが、遠く離れた場所で待っている。時間が経てば状況が変わるから。

……時間が経てば？ 不意に自分の考えていたことに引つかかるものを感じて思考を止めた。

それは。時間に解決させることは――

「そんなの良いわけねえだろ」

――久遠輝が大嫌いなことだった。

並行世界

輝が考えた作戦は非常に単純なものだった。

テロリストの背後から不意打ちをする。そして、生まれた隙を瑞希につかせる。

これなら瑞希の足手まといにはならない……と思う。あくまで隙を作るのが目的であって、自分が格好良くテロリストを倒すわけではないのだから。

「行くぞ、俺……」

銃撃戦はまだ続いていた。策はある。時間はかかったが、瑞希と撃ち合うテロリストの背後に回り込むことも成功している。あとはこの物陰から出て、テロリストの気をこちらに向けさせるだけだ。

「……」

ふと自分の手を見つめた。もう震えてはいない。――走り出した。

「……っ！」

テロリストよりも先に瑞希がこちらに気づいた。僅かな間視線が交錯する。輝は右手を掲げ、自分が何をするつもりなのかを瑞希に伝えた。

しかしそこで流石と言うべきかテロリストも背後から迫る人の姿に気づき、銃口をこちらに向けた。

「って、気づくの早すぎんだよっ！」

それは輝にとっては完全に予定外だった。もう少し接近するつもりだったのに、こんな段階で発見されては危険度がグッと上がる。

とは言え、見つかったしまったものは仕方ない。輝は先ほど瑞希に手渡された手榴弾をテロリストに向けて投げつけた。

「……っせい！」

テロリストはその動きを目で追い反射的に身構えるが……しかしそれは地面を転がっても輝の狙い通り発煙することはなかった。何も起こらないという、予測できなかった事態にテロリストは対応で

きず、全ての動作を止めてしまった。

——そして、それは瑞希が突撃するには十分すぎるほどの隙だった。

「はあああああ！」

その光景を見届けると、輝は瑞希の射線に入らないように右に進路を変えて走る。

テロリストが慌てて瑞希に銃口を向け直そうとするが、それはあまりに遅かったようだ。

輝が目に戻すと飛び込んできた光景は、地面に伏すテロリストと、悠然と佇む瑞希の姿だった。

「あんた、ホンツとに馬鹿だったわね！」

その後、輝に待っていたのは瑞希の叱責だった。当然とも言っべきだが。

「一度逃げたのにわざわざ戻ってくるし、それにあたしはそんなつもりでアレを渡したわけじゃないのよ！」

「……耳が痛い限りです」

長い間瑞希の説教は続いたが、輝は甘んじてそれを受けた。

「……で、結局何で戻ってきたのよ、あんたは」

最後に投げやりな調子で瑞希が尋ねた。

時間が過ぎるのを待つのが嫌だったからと言うわけにもいかない。輝はもう一つの理由で答えることにする。

「お前が俺を助けようとしてくれたから、俺もお前を助けたかったんだ」

「……そんなことは身の程を知ってから言いなさい。手榴弾のフェイクは悪くはなかったけれど、あんたには百年早いわよ。ヒーローにでもなりたかったの？」

「知るか。ただな、助けられてばかりで何一つ返せないなんてのはゴメンなんだよ」

そう告げると、瑞希は目を丸く見開き、そして笑い出した。しかも、お腹を抱えて。本格的にツボだったような反応をされて、輝は釈然としない気分になる。

「……あんたって、結構意地っ張りよね」

瑞希が顔を上げて言った。

「意地を張って何が悪い。俺は個性を前面に押し出していく性質^{タチ}なんだよ」

「そ。ふふっ」

何が面白いのか瑞希はまだ笑っている。その表情は今まで銃を握って戦っていた人ではなく、あどけない笑顔を浮かべる同年代の少女そのもので、輝は思わず目を奪われた。

「さ、その話はそのくらいにしとこうかしら」

笑い疲れると、瑞希が表情を引き締めたので輝もそれに倣った。

雰囲気が一気に変わる。

「で、あんたハイダーだったの？」

「はい、たー？」

漂白剤？

「ハ・イ・ダー！」

「そのハイダーってのは一体何なんだ？」

「……知らない。ってことは、やっぱり……」

ぶつぶつと呟き、

「あんた、この世界では人を殺せないこと、知っている？」

「は？」

人を殺せない？ 藪から棒に何を言っているんだ、と輝は思う。

「今日は分からないことだらけだけど、そのセリフが一番だよ」

「そんな……本当に知らないの？ 冗談じゃなくて」

顔が密着しそうなほど思いつきり詰め寄られる。その瞳は真剣だったため、輝は改めて姿勢を正した。

「知らない。ついでに、さっきお前が言ってたハイダーってのも何だか分からない」

「……そう」

とだけ言い、瑞希は俯いてしまった。その表情は前髪に隠れて見えない。

そして数秒後に顔を上げた瑞希からは、やはりもう何も読み取れなかった。

「手短に話すわ。あんたにとっては理解できないことだらけだろうとは思うけど……聞いて」

「あ、ああ」

「まず、この世界はあんたの知っている世界じゃないわ。良く似ているだろうけどね」

「待て。その段階で既に俺の頭はついていけない」

「黙って。時間はそんなにないの」

「……分かったから銃を突きつけるな」

「よろしい。で、簡潔に言ってみれば、あんたは、こことは違う並行世界——パラレルワールドの方が分かりやすいかしら——から“跳んで”来た人間なの」

パラレルワールドから？ 跳んだ？

「あんたの住んでいた世界……現界げんかいって言うんだけど、そっちでは人殺しがあれば戦争もあるでしょう？」

「……そりゃあ、あるな」

「この世界、鏡界きょうかい——ああ、鏡の世界って書いて鏡界ね——では、それらが一切ないわ。」

鏡界では、人を傷つける行為は神に認められていないのよ」

「神？ 認められていない？ ……いや、思いっきり銃撃戦してただろ、お前ら」

「してたわよ、催眠効果のあるガスを散布する弾でね」

「……は？」

「別にこれは殺傷することを目的としてないのよ。さっきのヤツも、死んでなんかいないどころか掠り傷一つ付いていないわ」

瑞希に促され、先ほどのテロリストが倒れている地点に移動した。

「確かに外傷は見当たらないな……ってか、こんな所で警戒を怠ってても良いのか？」

「一度銃撃戦があった所、しかも仲間が倒れている所なんて何の罠があるか分かったもんじゃないから、その心配は要らないわよ。誰も来ないわ。」

「それじゃ、一度見せた方が良いと思うからちよつとだけ下がって」「あ、ああ」

指示された通りに数歩テロリストから距離を空ける。

それを見届けると瑞希はどこからかナイフを取り出し、それを投擲した。

そのナイフは倒れたテロリストに突き刺さる――

「えっ！」

――ことはなく、その五十センチほど手前の空間で、まるで見えない壁に当たったかのように動きを止め地面に落ちた。

「なんだ……今の……」

輝が呆然と声を上げる。今のナイフは手品かと疑ってしまつくらいに不自然な動きをした。

「次、銃でいくわね。これの弾は催眠ガスが入っているから――メートル圏内の人間は強制的に眠らされるわ」

瑞希が今度は銃を取り出し、何の躊躇いもなく引き金を引いた。

「また……」

銃弾は速すぎて見えなかったが、またしてもテロリストの手前の空間でその勢いを殺され地面に落ちた。

「分かった？ 今の現象が、“キャンセル”と呼ばれるもので、この世界の住民には誰もがそのチカラを持っているの。……誰にも傷つけないチカラをね」

「……そして、そのキャンセルとやらがあるから、人殺しができない」

「そう。そんなわけで、銃弾を肩に喰らったあんたは現界から来た人間だってバレたの。キャンセルが発動しないことが証拠となつて

ね。……本来なら殺傷を目的としていない銃弾だったのから、大した傷にはならなかったのが唯一の救いね。銃弾の勢いが止まった瞬間に催眠ガスが散布される設計になってたのもラッキーだったわ」「ラッキーと言われても……」

ちよつと、何と云うかまだ頭が整理できていない。

要は鏡界には怪我とか人殺しがない。それはキャンセルがあるから。でも、輝は現界から跳んできたからそんなチカラは持っていない。つまり怪我をした「現界の人間。俺死ななかった」「ラッキー。」

——と輝なりに要点をまとめた。

「よし、なんとか整理できてきたかも」

少しずつこの世界の仕組みが理解できてきたような気がする。

名前と名前

「そう。まあ細かな定義は置いておくとして、あんたの住んでいた世界——現界と、今いる世界——鏡界の大きな違いはキャンセルの有無ね。最終的な因果とかはどちらも共通しているわ」

「……因果と言われても何のことかさっぱり」

「運命とかそういうものよ。つまり、現界で生きている人間は鏡界でも生きている。現界で死んだ人間は鏡界でも死ぬ。」

例えばAと言う同一人物は二つの世界で同じ因果を持った人生を送っているの。Aは現界と鏡界に同じ年に生まれ、二十八で同じ相手と結婚し、三十で子供を持ち、八十で死ぬ——みたいな感じにね」

「そう。現界と鏡界は表裏一体の世界なの。その人間関係や、文化のレベルまでね。共通点は非常に多いわ」

「じゃあ、さつき並行世界と言ったけど、どうして俺は別の並行世界に跳んでしまったんだ？」

「……その理由はまだ明らかになっていないわ。ただ、あんたみたいに現界から鏡界に跳んで来た人間をここではハイダーと呼ぶの。ハイダーは元々こちらの世界の人間ではないから、さつきも言った通りキャンセルは発動しないわ。体は鏡界にあるのに現界のルールに従わなければならない」

「俺はこの世界では異分子だということだよ……。しかもさつきの奴らの驚きっぷりからして、かなりレアなケースだったり？」

「ご名答」

「ご名答ですか……」

並行世界とか、既に自分という存在がある別の世界に跳ぶなんて、どんなファンタジーとかSFの物語だよ、と輝は思う。

「待てよ。じゃあ、元々こちらの世界にいた久遠輝はどうなっているんだ？ 鏡界にも久遠輝はいたんだろ？」

「……言いにくいけど、鏡界で生きていた久遠輝は“消えた”はずよ。鏡界の久遠輝はあんた一人しかないわ」

「消えた？ 俺と世界を交換して現界に行ったとか？」

「それは可能性としてはあるかもしれないわね。確かめた人はいないけど」

「……そうか」

本当に理解し難い話ばかりだ。頭が痛くなってくる。

「さて、今話すべきなのはこれくらいかしら。そもそも説明なんて後でも良かった気がするけど」

「……」

そうなんだよな、と内心で同意する。今もまだ完全に安心できる状況ではない。

「つてか、何で俺、テロリストに狙われたんだ？」

「ハイダーには利用価値があるから、捕獲したいんでしょう」

「利用価値？」

「そ。色々ね。さあ、そろそろ移動するわよ。……これを着て」
「ん？」

あからさまに話題を逸らされたような気もするが、ともあれ輝は瑞希から受け取った上着に手を通した。

「血なんか見せたら自分からハイダーですって公言しているようなものだからね。この世界でハイダーは異端の存在よ。狙われるのは何もテロリストだけじゃない」

「……げ。見つかったら研究施設で実験のためになんちゃらとかはマジでないよな？」

「……」

瑞希は肩を竦めた。答えになっていない。

「ま、自分の命のためにも、今後は怪我なんてしないことね。あと、誰にも自分がハイダーであることを明かしちゃダメよ」

「……誰にも？」

「そ。女の子と二人きりの秘密があるなんて嬉しいでしょ？」

意地悪く笑う瑞希だが、輝はそれよりもむしろ、瑞希がどうやら自分のことを秘密にしてくれるみたいであることの方が気になった。「それは時と場合によるな。……まあ、瑞希が秘密にしてくれるってのはありがたいけどさ」

「なっ！」

途端に瑞希の意地悪そうな笑みが引つ込み、顔に赤みが差した。

「ん？　もしかして今、秘密にするって自分が言ったことに気づいたのか」

なんだろう。並行世界について丁寧に説明をした上、自分のことを秘密にしてくれるあたり、瑞希はかなり良いヤツなんじゃないかな、と輝は思う。

「知らない！　それより、それを着たのならそろそろシエルターに行くわよ！　この街を襲ったテロの残党はほとんど捕えられているはずだし、最初にあたし達を襲ったヤツの所にも仲間が向かったでしょうからね」

「あ、ああ。ところで、ふと思ったんだけど、人殺しができないのに何でこんな……街を破壊するようなテロが行われているんだ？」
勢いよく歩き出した瑞希に従いながら、話題を変えたそうな彼女に助け舟を出してやる。

「……あいつらの目的はこの国に経済的なダメージを与えることよ。血を流させられないから、金を流させるの」

「それはまた……何と言うか嫌々世界だなあ、ここ。折角人殺しできないんだから、平和に暮らせば良いのに」

「どんな世界であつても、憎むことがヒトの本性なんじゃないの」

「さざりと言うなよ」

的を射ているとは思っけどさ、と輝は少し笑った。

瑞希の指示に従って移動をし、幸い誰からも見つかることもなくシエルターとやらのある場所に到着した。

シエルターは学園の下にあるらしい。名は景悠学園。偶然にも、和奏の通う地元の学園だ。……和奏もここにいるのだろうか。

「何してるのよ？ 早くしなさい」

「あ、ああ」

促され、思わず止めてしまっていた足を動かす。

「ここにシエルターがあるなんて、初耳だな……」

「そりゃそうでしょう。これは鏡界にしかないからね」

「……さっきから気になっていたんだけど、お前さ、やたら現界について詳しくないか？ こっちの人はみんなそうなのか？」

「それは……まあ人によるかもしれないけど、あんた達の世界の存在に関しては誰もが知ってるわ。現界の人間は鏡界のことを知らないこともね」

「なるほど。確かに俺らの世界では鏡界の存在は知らないな」

「さ、着いたわ。ここに来る途中でも言ったけど、あたしが話を通すからあんたは何も喋らないで」

「分かった」

そこは学園の中庭の中央に立っている大きな木の前だった。大きいと言うよりも、太いと言った方が良さかもしれない。直径で四メートルはある木だ。高さもそれなりにはあるが、とにかく太いことが目につく。ここにシエルターがあるというのが瑞希の話だったが……輝は正直まだ半信半疑だった。

瑞希はその木の前に立ち、おもむろに木の幹に空いていた小さな穴に指を突っ込んだ。

『——指紋認証をクリアしました。市民番号8003589風流瑞希。所属、シーカー』

機械的な声が聞こえたかと思うと、次の瞬間、木の幹が分かれ、人が四人は並んで通れそうな大きさの扉が現れた。

「ほ、本当にあった……」

思わず驚きの声が小さく漏れてしまった。……不覚にもカッコいいと思ってしまったのは仕方ない。

『……お〜う、瑞希か？ どうしたん？ 一応作戦行動中なんだけどな』

次に扉のモニターフォンから聞こえたのは機械の音声ではなく、やたらと軽薄な感じの男性の声だった。

「……承知しています。作戦行動中に逃げ遅れた一般人を保護しましたので避難をさせに来ました」

『なるほどね。こっちの通信が途絶えていたから心配したぞ』

「申し訳ありません。端末を失ってしまいました」

『まっ、無事だったのなら良いけどね。作戦はほぼ完了したし。』

じゃ、瑞希は中田班と合流して残りの掃討に加わって。その男の子はこちらで保護するよ』

「了解しました」

『……ひよつとして』

「はい？」

『その男の子に手えつけてたんじゃないだろうね？』

「ぶっ殺すぞ、クソ兄貴！」

『お〜う、怖い怖い。じゃあね〜』

からからと笑う声を残したまま通信が切れると、瑞希は憎しみを込めて扉を蹴った。

決して意図したわけではないだろうが、それに驚いたかのように扉が開いた。

「えーと、今のは……お兄さんですか？」

「……」

無言でキツと睨まれ、輝は口を閉ざした。怖い怖い。そうだよ、怖いよ。こうなるって分かっていただろうに。あの人絶対確信犯だろ、と輝は思う。

「中に入ったら適当に生きてなさい。怪しまれたら記憶喪失ってことにでもすれば良い。」

もう一回言うけど、自分がハイダーであることは絶対に誰にも言わないことね。じゃ」

「あ、おい」

「……何？」

さっさと踵を返してしまふ瑞希を輝は呼び止める。

「まだ礼を言ってない。……色々ありがとう」

本当はいくら感謝しても、し足りないくらいだ。今はせめてもの思いを込めて頭を下げる。

「……」

暫く瑞希の言葉がなかったので、輝はゆっくりと頭を上げてみた。瑞希は服を握り締め、口を開いて何か言うべきか悩んでいるようだった。

そして――

「輝！ 死ねる体持つてるからって、簡単に死ぬんじゃないわよ！」

――そう言い残し、手をひらひらと面倒くさそうに振ると、少女は戦場に駆けていった。

「“輝” って……お前だって馴れ馴れしいじゃんか」

でも、その呼び方が対等に扱ってくれた証のように思えて、不思議と悪い心地はしなかった。

「第1話 鏡界 完」

風の音が聞こえる

街の復興は驚くべきスピードで進んでいた。ものの三日で燃えたビルなどの瓦礫は取り除かれ、既に建物の修理が始まっている。そして街に住んでいた人々は「やれやれ、またかよ」みたいな感じで、さして気にすることもなく普段の生活に戻っていった。

——あれから一週間が過ぎた。

輝が戦争のないパラレルワールド……鏡界に跳んできて、一週間。似たようで違う世界、というものがどれだけ厄介かを思い知らされるには十分な期間だった。

例えば、細かいところなら、戦争や暴力事件などのニュースが全く無かったり。……まあこれはそこまで厄介ではないけれど、自分の常識が通用しない点は多くあった。

例えば、隣の部屋に住む人とマンションで偶然会った時にこちらから挨拶をしたら、その人に「おいマジかよ！ 今日雪なのか！ ？ 畜生！」とでも言いたそうな顔でドン引きされたり。

——例えば、輝が学園に通っていたり。

「……恨むぞ、この世界の久遠輝……」

現界ではフリーターだった輝は、鏡界では学園生だった。

あれから一週間が過ぎ、そして輝は今まさに学園に向かっている。

「恨むのなら現界のあんたを恨みなさい。自分自身を、ね」

輝の隣を歩く瑞希が、一も二もなくそう言った。彼女とのこういった会話にも慣れつつある。

瑞希も輝と同じ学園の制服を着ていて、彼女も学園生であることを示していた。

「大体、あんたくらいの年で進学しなかった人なんてそんなにいないでしょ？ 何であんたは進学しなかったのよ」

「そりゃあそうだけど……色々事情があつたんだよ」
慣れない制服の袖を掴み、ため息を吐く。

——繰り返すが、あれから一週間が過ぎた。

あのテロの翌日に収束宣言が出され、輝を含めた民間人は帰宅を許されたため、ようやく自宅に帰った輝をマンションの前で待っていたのは、あの少女——凧流瑞希だった。

そして瑞希は宣言した。

「これからあんたを毎日監視するわ」

それは、迷惑極まりない宣言だった。少なくともその時は。

ところが、瑞希を家に上げ、物凄く回りくどい話（この世界に来たばかりのハイダーは放っておくと危険とか、あんたがハイダーってバレたら自分にも迷惑がかかるとか）を聞いていく内に、どうやら彼女はこの世界に不慣れな輝が迂闊なことをして正体がバレるのを防ぐための善意から言っていることが伝わり、輝はありがたく彼女の言うところの“監視”を受けることにしたのだ。

「お前ってさ、やつぱ良いヤツだよな」

と言ったら速攻で殴られたあたり、やはり瑞希は誰かに褒められるのに弱いんだと輝は思っている。

それから数日が経ち、監視と言う名の教育により輝はようやくこの世界で何とか生活できるほどの知識を身に付けることができた。

……とは言え、鏡界の久遠輝は学園生だということを瑞希から告げられた時には流石に絶望した。就学したら負けだと思っていたから……ではなく、ただ単に中卒でバイト漬けの自分は学園がどんなところかさっぱり分らないからだ。

本当のことを言えば、家に制服がある時点でこりゃあヤバイと思っていたが、鏡界の久遠輝にコスプレの趣味があるんだと自分に言い聞かせていたため、自分が学園生だと知った時のショックは余計に大きかった。

「あんた、明日学園行くわよ。あたしもそこに通っているから途中までは一緒に行くけど、細かいフオローなんてできないからくれぐれも気をつけなさい」

と、瑞希が輝の儚い希望を打ち砕いたのが昨日。

必死に登校拒否の意思を示したのだが、今朝わざわざ迎え（家のチャイムを連打し）に来てくれやがった瑞希を追い返すことができず、輝は何年かぶりに制服なるものに腕を通すことになったのだ。

そして、今に至るというわけだ。

「ため息なんか吐いたって現実是不変わらないわ。これから生きていくには、鏡界の久遠輝の人間関係とか生活を知らなきゃダメでしょ？」

「正論です。……しっかしなあ」

「しかし、なあに？」

その猫撫で声怖えよ……なんて言ったら自分の命が危ないから言わないけれど。

「いやさ、俺はこの世界——鏡界で学園に通ったりして生きていかなきゃいけないんだなあ、って思ってた。……なんつーか、実感が湧かないんだよ。いきなり並行世界に跳ばされてさ、ここで今日から暮らせて言われたって」

そんな輝に、瑞希は口調を改め聞いてきた。

「現界に戻りたい？」

「うーん。そら、まだ判断できないな」

「……」

「なんか、意外そうな顔してるな？」

「……まともな神経がある人なら帰りたいって思うわ」

「毒のある言い方があるがとう」

「で？ どうしてまだ判断できないの？」

「何かさ、この世界に俺が来たのは意味があるんじゃないかなーっ

て思うんだ。もしかしたら」

「……何、そのどこかで聞いたようなセリフ」

「いやいや、実際こうでも考えなきゃどんな世界でも生きてけねえよ。世の中、意味なんてないものが大半だろ？ 毎日学校行つてさ、会社で働いてたりさ……何の為に生きてるんだかたまーに分からなくなる時つてあんじゃん。」

だから、意味を探すんだよ。その可能性がある限り、どんなにくだらないことでも投げ出さない……ってか飽きないようにか？ 俺はそうしたいと思っている」

「……つまり、そうやって自分を騙すと？」

「有り体に言えばそうだな。自分を騙して、励まして、生きる」

「ふーん。何か……前向きなのか、後ろ向きなのかビミョーね」

「前向きだよ。俺は後ろを向くのも、時間に解決させるのも嫌いなんだ。」

もちろん、戻る方法があるなら探したいけど、今はまだこの世界を知りたいと思ってるのもホント」

「じゃ、学園が楽しみね」

「……今、忘れかけてたわ。学園はやっぱなあ……行きたくないんだよ……」

自分で言つといてアレだけど、数学とか英語の授業の意味探しながら意味あんの？

と、がつくりとする輝を置いて瑞希は先に行ってしまう。二、三歩進むと立ち止まり、こちらを振り返った。スカートがふわりと翻り、一瞬瑞希の健康そうな太ももが露わになる。

「ほら、意味を探しに行くんじゃないの？ 早くしなさいよ、輝」
そう言つて歩き出す瑞希の姿は、どこことなく嬉しそうで、笑っているようだ。それを眺める輝は、瑞希がまた新しい表情を見せたことを微かに意識する。

数日一緒に過ごしたけれど、この少女は表情がころころ変わるのを見ていて飽きないというのが輝の心境だ。

「学園ねえ。そう言えば……和奏もあそに通っているんだっけか」
「ごたごたしてたから、鏡界では一度も会ってない。顔を見て安心したいところだ。」

ぐんぐん先を行ってしまふ瑞希の背を見つめ、最後にもう一度だけため息を吐く。それはもう、学園に行くことが億劫だから出るため息ではない。

「行きますか」

眩きを五月の風に寄せ、輝は歩き出した。

借り物の日常

「つてな感じで、学園に到着したわけだが……」

「何よ？」

「まず俺の上履きはどこだ」

「……あ」

輝は校舎内に入る段階で早速問題に直面していた。当たり前と言えは当たり前だが、出席番号はもちろんのことクラスさえも分らないのだ。百単位である箱の中から自分の上履きを探すのは到底不可能だ。

「そつだ。学生証」

瑞希が思いついて言う。確かに学園生であることを示すそれがあれば、そこには輝の出席番号は載っているだろう。

しかし――

「……家に置いてきた」

「バツカじゃないの！」

瑞希の罵倒に輝は身を縮こまらせた。

「アレだよ。ほら、普段あまり使わないクレジットカードを持ち歩くのって危ないだろ？ その感覚で……な？」

「同意を求めるな！ んなのあるわけないでしょ！ 身分証持たないなんて、逮捕されたらどうすんのよ！？」

「お。財布にTカードが入ってたぞ」

「今、あたしはあんたがキャンセルを使えないことを神に感謝したくなつたわ……」

瑞希が物騒なことを言う。その足が振り上げられそうになったため、咄嗟に輝が鞆でガードしようと身構える。

と、その時――

「朝っぱらから何をしているのですか、久遠」

――とても冷静な声が言い争う二人の背後から聞こえ、二人はそ

のままの姿勢で動きを止めた。

そちらに目をやると見慣れた少女の姿が長い髪をたなびかせながら立っていた。鏡界に来てからも輝が気にかけていた数少ない友人の一人、華秋和奏だ。

「おお、和奏か。おはよう」

「おはようございます。……それで、あなた方は道を塞いでいるという自覚はあるのですか？」

和奏に冷ややかに言われ辺りを見渡す。下駄箱の通路で言い争いをしていた二人は、登校してきた学園生の邪魔にしかなくなっていなかった。

慌てて道を譲り、二人は改めて和奏と対面した。

「そちらの方は？」

「……風流瑞希よ。初めまして、華秋さん」

和奏に尋ねられ、それに瑞希が一步前に出てやや突っかかるような態度で自己紹介した。

「私をご存知なのですか。失礼ですが、同じクラスの方でしたか？」

「ううん、そういうわけじゃないけどね」

「そうでしたか。……まあどちらとも良いです。改めまして、華秋和奏です」

鞆の前に抱え、和奏が頭を下げる。彼女は無愛想に見えると言われがちだが、礼儀はとても正しく決して不機嫌なわけではない。

「では、先に教室に行かせていただきますね。失礼します」

「あ、待って！」

やるべきことは済んだと言わんばかりに教室に向かおうとする和奏を、不意に何かを思いついたらしい瑞希が呼び止めた。

「あなたって、こいつと同じクラスじゃなかったっけ？」

言いながら輝を親指で指差す瑞希。

「……そうですが、それがどうしましたか？」

「ちょうど良かったわ。久遠君はこの前のテロの時に一部の記憶を失ってしまったみたいで、学園についてのことをほとんど覚えてい

ないのよ」

「……そうなのですか、久遠？」

驚いても良い場面だったが、和奏の表情は相変わらずその色をと
たえることもなく、ただ少し心配するような目で輝を見る。

隣の瑞希を見ると彼女は意味ありげに目配せをしていて、輝はその
意図を悟る。要は、同じクラスの彼女にも色々フォローしてもら
えということだろう。

「実はそうなんだ。あ、和奏のことは覚えてるんだけどな」

「でね」

と瑞希がまくし立てるように言う。

「彼は自分が記憶喪失であることをあまり人に知られたくないそう
なのよ。周りの人に心配をかけたくなくてね」

「はあ」

「そこで、華秋さんには久遠君の手助けをして欲しいのよ」

和奏は訝しげに瑞希を見つめていたが、やがて同意を示すように
頷いた。

「分かりました。その記憶喪失と言うのがどの程度なのかは分かり
ませんが、できる限り久遠の手助けをしましょう」

「そ、ありがとう」

「……あなたに礼を言われるようなことはありません」
ぶっきらぼうな言い方ではあったが、瑞希は特に気にした様子も
見せず

「それじゃ、あとよろしくね」

と言ってさっさと先に行ってしまった。

「ええと、俺が礼を言うべきだよな。ありがとう、和奏」

「どういたしまして、です。では私達も行きましょう。下駄箱の位
置は分かりますか？」

「……いや、分からない」

「そうですか。こちらです。確かあなたの番号は……」

全く面倒そうな態度も見せず、それが当たり前であるかのように

下駄箱を上から下へと眺める和奏を見て、輝はもう一度心の中で和奏に感謝した。瑞希といい和奏といい、自分の周りには親切な人ばかりで本当に恵まれていたと、そう思う。

和奏のフォローや、午前中は学園の再開に関するお知らせなどで授業がなかったのが幸いして、輝は何とか午前中を乗り切ることができた。

そして昼休み。

「おお、感動した。これが購買のパンの味が」

輝は和奏と一緒に中庭で昼食を摂っていた。初めて食べる購買のパンに輝が感動していると、同じく購買で買ったサンドイッチを手にした和奏が言った。

「この学園は無駄に広いので学食だけでなく、こうして購買で買った物を中庭で食べる人も多いみたいです」

「へえ」

確かに広い中庭には、例のシェルターが隠されている大きな木を囲むように何人かの男女がグループを作って昼食を摂っていた。ベンチもいくつか設置されていて、輝と和奏が今腰かけているのもそこだ。

「本当に学園については何も知らないのですね」

「ああ、そうみたいだな」

和奏の言葉に頷いた。記憶喪失ということになっているとは言え、その嘘を和奏に通すのはまだ抵抗がある。

「これから授業が始まりますが、大丈夫ですか？」

「それがネック。いやむしろそれだけがネック」

「何をしに学園に来ているのだからなくなる台詞ですね。……」

まあ、気楽にやれば良いんじゃないでしょうか。これまでのあなたも成績が良かったわけじゃないですし」

「お、マジか。安心した」

ありがとう鏡界の久遠輝、お前も馬鹿だったんだな。さっきの恨み言はどこへやら、輝は自分が過度な期待のされている学園生でなかったことに感謝した。

「……………」

「……………」

説明することも尽き、そもそも食事中に喋ることなどないからか、二人の間の会話は途切れた。現界でも良くあることだったので、輝もさして気にせず惣菜パンを胃に収める。

ふとサンドイッチを少しずつ食べる和奏の様子を横目で見た。淡々とした調子ながらもアルバイトに遅刻した自分を起こしに来てくれたり、今もこうして輝の手助けをしてくれる和奏。交わされるのは必要最低限とも言える会話。

——現界の和奏と鏡界の和奏の間に性格の差などはほとんど感じられない、というのが輝の正直な感想だ。それは、うっかりするとここが鏡界だということすら忘れてしまいそうなほどに。

瑞希の話を聞く限りでは、鏡界と現界の同一人物でも性格が一致しないことや人間関係が異なることは良くあるらしい。輝のように進路が異なることも然り、だ。その点、和奏に現界と鏡界のギャップを感じないのは輝にとって歓迎すべきことだろう。

……ただ、この和奏との関係は鏡界の久遠輝からの借り物であり、自分が築いたものではない。そのことをそう簡単には割り切れないのもまた事実だった。

いちごミルク味

昼食を摂り終え、輝の教室である二年七組に戻るとそこには死体があった。

「いつからここは死体置き場になったんだ……」

……詳しく説明するなら、教室の後ろに設置されているロッカーの上に小柄な男が仰向けになっていた。と言うかロッカーの上で情眼を貪っていた。自分の机、百歩譲っても床で寝るのが常識であるが、男は堂々とロッカーの上を占拠している。教材を取りに来たクラスの間も、男に気づくと驚きの表情を浮かべた後、その睡眠を妨げるのが恐ろしいのか何もできずにすごすこと帰っていった。

何とかした方がよいよね？ でも無理だよ、アイツ絶対起きないもん。と、クラスからひそひそと話し声が聞こえるが、男は全く目を覚ます様子もなく死体であり続けている。

「……」

そして残念なことにその男は久遠輝の友人だった。

「和奏。こいつって俺の知り合いだっけ？」

「ええ。更に言うならば、このクラスで彼と会話するのはあなただけです」

「そうか」

現界と同じような関係だということに肩を落としながら、輝は男をどうにかするべく近くに寄って行った。

「こいつも学園生だったのか……」

幸せそうな寝顔を浮かべて眠る彼の名はしいな椎名健。現界では輝と同じく中卒のフリーターであり、訳あって多くの時間を共にしてきた男だ。鏡界の健が学園生になっていたのは意外だった。

「起きろシートケ。こんな所で寝てんじゃねえよ。クラスの皆さんに迷惑だろうが」

懐かしいあだ名を呼び、健の耳を引っ張った。人を傷つける意思

のない行動にキャンセルは適応されないと教えられていたので、このような多少のお仕置きはセーフだ。

「うにゅあ」

妙なうめき声を上げながら、健の目が開いていく。

「なんだ、輝か……くう」

が、途中で閉じた。

「寝るのかよっ」

「……眠いんだよう。二度寝くらいさせてよう」

「まだ一度も起きてないだろ」

「じゃあ一度寝する」

「聞き覚えのない単語を作るな」

「……………」

「よし、二度寝なら許可してやるから一度起きろ」

「……起きる」

「よし、偉い子だ」

健はごしごしと目を擦りながら身を起こすと、細い腕を後ろに回し寝癖のついた髪を掻いた。瞼はトロンとしていて気を抜いたら今にも眠ってしまいそうだ。童顔のため、その姿は実年齢よりもずっと幼く見える。

一度起きたから寝る、とか言わせる前に輝はポケットを探り、その中に思っていたものがあることを確認すると、

「むぐっ……………」

健の口に飴玉を突っ込んだ。

「はあああ。甘〜い」

途端にほんわかとした笑顔を浮かべ飴玉を頬張る健を見て、輝は彼の目を覚ますミッションに成功したことを確信した。

「っは！ またいつもの手段に引っかけた！」

気づいた時にはもう遅い。健の意識は完全に覚醒し、飴玉を味わうためにフル稼働していた。

「ぐぐぐぐぐ。いちごミルク味とは卑怯な……ウマイから怒れない

じゃんか」

「はいはい。良いからそこをどけよ、シータケ。大体何でロッカーの上で寝てんだよ」

「ロッカーは金属だからひんやりして気持ち良いんだよ!」

「誇らしげに言われても……」

ぴよんと素直にロッカーから飛び降りる健を見、輝は手を目に当てて嘆息した。きっと鏡界でも自分は彼の保護者的役割だったのだろう。このポケットの飴玉がそう告げていた。

ふと視線を感じて健を見ると、彼の二つの眼差しがジツとこちらの目を見つめていた。

「んゝ輝、何か雰囲気変わった?」

「……気のせいだろ。五月だしな」

「そっかゝ。五月だしねゝ」

こう見えて健は鋭い部分がある。悟られるのも時間の問題かもしれないという予感がした。

「そう言えば午前中は姿を見かけなかったが、どうしたんだ?」

「んゝ、寝てたよ。今来たばっか」

来て早々寝てたということになるが、輝はそれを指摘する気にはならなかった。

「あ、昼休み残り五分あるね。良いや、机で二度寝しよ」

健は輝の言葉も待たずに自分の席へと歩き去っていった。途中で女子に何か話しかけられていたようだったが、耳を貸す素振りも見せずに席に座る。そして、尚も何かを言い募る女子を無視したまま小さくなった飴を砕いて胃に収めると、何事もなかったかのように眠りの世界へと旅立った。女子は信じられないといった感じで肩を怒らせながら去って行った。

椎名健は非常にマイペースな男なのだ。

「……相変わらず、万人受けするキャラなのに他人に興味がないヤツだな」

その姿は、輝の知っているシータケこと椎名健そのものだった。

健は基本的に自分の興味のある対象としか会話をしようとしなく、かく言う輝も出会った当初は健の華麗なるスルーを経験した人だ。「もう一人、クールで他人に興味のないヤツもいるけどな」

「それは私のことでしょうか」

「決まってるだろ……って和奏、お前いつからそこにいた？」

横を見ると、てっきり自分の席に戻ったものだと思っていた和奏の姿があった。

「ずっといましたよ。……どうやら私も彼の興味の対象ではないのですね」

「どうだろ？ 和奏とシータケなら結構反りが合うと思うけどな」

「そうですね。まあ、こちらからどうしようとする意志はないので別に良いのですが」

言葉を聞くと冷めた反応だったが、彼女の言う「まあ」ですが「は必ずしも本心でないと輝は知っているので、もしかしたら脈があるかもしれないと思った。」

放課後になると、死体が二体が増えていた。片方は言わずもがな、健。

そしてもう片方は、

「全っ然分からなかった……」

輝だ。机にへばりついたまま怨嗟を零している。

「何なんだ、この授業は。いつから数学は英単語を使うようになったんだよ……」

要するに授業に全く付いていけず、心が折れそうになったわけだ。午後にあったのは数学と英語と物理。一年と一か月のハンディキヤップを埋められるはずもなく、輝は教科書の内容を何も理解することができなかった。

仮にテストがあったとしたら輝は記号問題しか答えられないだろう。しかし、その日は近いだろう。赤点を取って留年したくはない。

「勉強しないとヤバいな……」

一年の内容から復習したいところだが、一年の時の教科書は全て処分してしまったらしい。

「仕方ない」

帰りがけに本屋に寄って参考書でも買うことにしよう、と輝は決めた。

「さっきから何をぶつぶつと言っているのよ？」

顔を机から引っぺがして腕に乗せ視線を上げると、鞆を腰の前に抱えた瑞希が輝の前にいた。

「何でもない。……何か用か？」

「用も何も授業終わったのよ。帰るに決まってるでしょう」

「部活は？」

「帰宅部。ほら早く立ちなさいよ」

「あいよ」

瑞希が手を引っ張り、顔が腕から落ちそうになったため、仕方なく身を起こす。

「和奏は……帰ったのか」

教室を見渡しても、談笑する生徒や爆睡するシータケしかいない。和奏はもう帰宅したのだろう。

「ん？」

何故か教室にいた何人かの生徒と目が合った。目が合うとすぐに逸らされ仲間内でのお喋りに戻っていったが、自分のことを噂されているようで良い気分はしなかった。集中すれば聞き取ることとはできるだろうが盗み聞きはしたくないので、気にしないことにして帰り支度を手早く済ませ瑞希と共に教室を出た。

その時の輝は、視線が自分だけではなく瑞希にも向けられていたことに気づくことはなかった。瑞希もまた自分への視線など気にしないので同様に意識することなく、二人の去った教室には飛び交う噂話だけが残った。その騒ぎ声で目を覚ました健が不機嫌そうに教室から出て行ったことは、とんだとばっちりだっただろう。

千円ちよつどの買い物

瑞希とナチュラルと一緒に登下校をすることになったが、輝にはわざわざ口に出して指摘する気はさらさらなかった。そもそも彼はオープンな性格であるという自負があったし、この数日で瑞希の性格も掴めてきた。……言ったら多分銃を突きつけられる。

そこで輝はこの時間を鏡界についての質問タイムにあてることにした。自転車がなかったため徒歩通学だったが、こうして話ができるという点ではこちらで良かったと思う。

「結局お前の言ってたシーカーってのは何なんだ？」

「ああ、シーカーってのは国際的な軍隊みたいなものよ。まあ、正確には組織そのものじゃなくて組織に属する人のことを言うけれど、組織の名前がないから結構ごっちゃになってるわ。

いくら戦争がないと言っても、ああいったテロとかはある。その対処がシーカーの役目よ。あたしもその一人ってわけ」

「……まだこんなに若いのか？」

「審査に年は関係ないのよ、シーカーってのは。意志さえあれば何歳でも加入することができる。いつからそうなったのかは知らないけど」

「へえ」

瑞希が言うからにはそれが常識なのだろう。不意に頭をよぎったが、彼女が何を思っただけでシーカーになったのかは軽々しく聞いてはいけない気がしたのでやめておこう。

「良い輝、覚えておきなさい」

「ん、何を？」

「絶対にあたし以外のシーカーには目をつけられちゃダメよ」

「……それは何でまた？」

「それは……」

続く言葉を待っている時だった。

「危なあああい！ そのカップルどいてくださあああい！」

微妙に勘違いの混じった悲鳴を上げながら、一台の自転車が猛スピードで輝と瑞希に向かって突撃してきた。

「うおっ！」

間一髪のところでは輝と瑞希がそれを避ける。自転車が二人の間を通過していった。

「申し訳ないっす！」

数メートル先でブレーキをかけ続けていた自転車がようやく止まったらしく、持ち主はその場で両手を合わせて頭を下げてきた。通り過ぎた時にちらりと見えた姿からして学園生だろう。スカートがめくれまくっていたような気もするが、一瞬だったので分からない。その学園生は相当急いでいたらしく、再び自転車にまたがると先ほどよりは少しだけ遅いスピードで残りの坂を下って行った

「……今の俺ってピンチだったよな？」

「あたしもよ」

乱れた髪とスカートを直しながら瑞希が呆れた調子で言った。

「今みたいなケースではキャンセルは発動しないわ。キャンセルの発動条件は“故意に人を傷つけようとした時”だから、事故や自分の不注意での怪我は起こり得るの。……もちろん、それが原因で死ぬ人がいないわけじゃない」

「そうなのか……てつきり何でも身を守ってくれる万能なものだと思っていた」

「その辺まだ詳しく説明してなかったわね。でも大事なことから覚えておいて。あたしたちは不死じゃないの。絶対に人を殺めてはいけないわ」

「おう？ そりゃあそうだな」

瑞希の言い方に何か引っかかるものを感じたが、言っていること自体は何も間違っていなかった。輝は神妙に頷いた。

瑞希と別れを告げた後、輝は一人本屋に向かった。

参考書や問題集よりも一年の教科書を買った方が良いのかと悩んだが、教科書は明日にでも誰かに借りることにして、参考書を買うと決めた。

さてレジに向かうかというところで、輝よりは十歳は年下の少女が本棚の上の方にある本を取ろうと必死に背伸びしている光景が目に入った。運悪く店員は近くにいないようだ。

「どれが欲しいんだ？」

輝が声をかけると少女はビクツとして後ずさった。輝はしゃがむと視線の高さを合わせて、身を縮こまらせる少女にできるだけ優しく聞いた。少女の片手には全財産であろう千円札が握られている。

「あれ……」

やがて少女がおずおずと指差したので、輝は立ち上がり本棚に目を向ける。

「うーん、これか？」

「ちがう、となり」

「どっち側？ お箸を持つ方、それともお碗を持つ方？」

少女は自分の手を見つめ、宙でその動作をすると右手を掲げた。

「おちゃわん持つ方！」

「左利きだったか……ほら、取れた」

少女が選んだ本はハードカバーの小説を手渡す。

「そんなの読むのか？」

「……………」

少女は首をぶんぶん横に振った。

「プレゼント……おかーさんに」

「そうか。これからも親は大切にするんだぞ？」

「……うん。おにーさん、ありがと」

はにかみながらそう言うと、少女はレジの方に走っていった。

「さて、俺もさっさと買って帰るかな……」

レジに向かうと、少女がちょうど会計をしているところだった。その後ろに並ぶ。

「いらっしやいませー。えーと、千三百円になります」

やる気があるんだかないんだか分からない声色の女性店員が、バーコードを読み取ったその瞬間、輝は、あれ、と思った。少女はレジの上で手のひらを広げて代金を払っているようだ。しかし、確か少女が握っていたのは千円札一枚だった。それでは足りない。

「ちょうどお預かりします。ありがとうございましたー」

プレゼント用だと聞いてしまったからには不足分を払ってやろうと思い輝は前に出かけたが、会計は何事もなく終わり少女は嬉しそうな足取りで去って行った。

「お次の方ー、ってどうかしましたか？」

「いや、別に……」

やたらとトップの毛があちこちに跳ね、襟足が長い髪型の女性店員と目が合う。

ひょっとしたらあの少女は小銭は別に持っていたのかもしれない、と思ったが、その予想は裏切られた。

店員がレジに入れようとしているそれはどう見ても千円札一枚だったのだ。

「……今の会計、足りなかったんじゃないのか？」

「あ、バレましたか」

舌を出して笑う女性店員。化粧はしていないが顔立ちのはっきりとしていて、輝とそう年は変わらないように見えた。

「いや、自分のミスっすよ。仕方ないんですこっす」

その女性店員はとぼけた調子で言いながら自分の財布を取り出すと、きつちり三百円をレジに入れた。……とんだ茶番だ。もちろん良い意味でだが。

「さー、お待たせしました。どうぞー……って、あれ久遠先輩じゃないっすか」

「？」

「すみません。気づかなくて。ども、度々申し訳ないです」

鏡界の輝の知り合いだったのだろうか。どう対処すべきか咄嗟に浮かばない。

「あ、自分、さっきの坂の、ほら」

「ああ！ 暴走チャリの！」

「そうです。それです。初めまして、萩原はぎわら深有みゆです」

どうやら知り合いではなかったらしい、と輝はホッとしながらも言葉をかけた。

「学園生だよな？」

「ぴっちぴちの一年っすよ、久遠先輩」

「ええと、萩原って言ったか？」

「あ、深有で良いっすよ。“みう”じゃなくて“みゆ”なんで、そこんとこだけ注意してください」

「そうか。で、深有。何で俺の名前知ってんだ？」

「あー、気になってたんすよ、先輩のこと」

「……は？」

「あ、決して恋してるとかストーカーとかじゃなくてっすね」

深有はぶんぶんと手を横に振った。

「久遠先輩と言えば、あのお美しくてクールな華秋先輩や、童顔で人に興味ゼロの椎名先輩と唯一コミュニケーションを取れる存在として一年の間では有名なんすよ」

「何だそれ……和奏とシータケと話せるだけで有名人扱いなのか、俺？」

「いやいや、ご謙遜を。久遠先輩だって……っとすみません。後ろにお客さん並んじやいましたね。会計しちゃいます」

流石にレジで働いている人といつまでも話してるわけにはいかない。輝は本を渡すと手早く会計を済ませ、深有から釣り銭とレシートを受け取った。

「また機会があったら話しかけても良いっすか？」

「ああ。何か俺結構お前のこと気に入ったし、いつでも声かけてくれ」

「お、久遠先輩から自分への好感度が上がりましたね。嬉しいです。では、また」

深有の快活そうな笑顔に見送られ、輝はその場を後にする。

「持つてるんすかね、久遠先輩は……特別な何かを」

その眩きはあまりに小さかったため、集中をしていない輝の耳に届くことはなかった。

「第2話 久遠輝であるために 完」

千円ちよつどの買い物（後書き）

第2話終了です。

ここ最近もう一作を書き始めたので少し更新ペースが落ちると思いますが、なるべく一週間に一度の更新は守りたいと思います。
気の長い話ですが、よろしければお付き合いください。

やまない雨

輝が学園に通うことになって二日目の朝。今日は瑞希が何か用事があるようなので、一人での登校になった。

「眠い」

今日の授業の予習をしようと思ったが、予習ができる前提条件すら理解できないまま足掻いた結果、眠りについたのは午前四時近くになってしまった。しかも内容はほとんど理解できなかったという結果。……流石に徹夜する気力はなかった。

中途半端な眠気と戦いながら通学路と歩いていると、長い襟足にツンツンの髪の毛の学園生に出会った。昨日の本屋の店員、萩村深有だ。向こうもこちらに気づいたようで、軽く会釈しながら近づいてきた。

「あれ、久遠先輩じゃないですか。どもです。……って、どしたんですか？ 随分と眠そうすけど」

「深有か。おはよう。いや、昨日買った本を読みふけてたせいで寝不足なんだ」

「なるほど……確か買われたのは参考書でしたよね？ 勉強すか？」

「そんなところ」

欠伸を噛み殺しながら答える輝に、深有が感嘆の息を吐いた。

「は、二年生ともなると大変なんすね。自分らはまだ入学して一か月なんで、ちょっと今後が心配になってきました」

「うん、まあ……基礎は大事だと思うぞ」

俺が言えた義理ではないが、と輝は心の中で付け足す。

「肝に命じとくつすよ。ところで先輩、ちよろつとお聞きしたいことがあるんすけど」

「ん？ 何だ？」

「先輩って、椎名先輩とか華秋先輩とどうやって仲良くなったんす

か？」

「ああ。一年でそんなことが噂になってるんだっけ」

輝は昨日聞いた話を思い返ししながら、どことなく固い表情を浮かべる深有を見た。

「そつす。別に広めるつもりはないんですけど、やっぱ気になるんで、もしよろしければ教えて欲しいっす」

「……うーん」

話すこと自体は構わないが、鏡界と現界の出会いや親しくなる過程が異なる可能性もあるため、口にすることが憚られた。

「ダメっすかね……？」

横を歩く深有が輝を覗き込むように見ていた。

「……三百円分だけな」

「はい？」

「何でもない。良いよ、話す。って言ってもそんなに大した話じゃないんだけどな」

「ホントですか、ありがとうございます」

不安げな表情から一転して、弾けるように笑顔が浮かぶ。

「まず、出会いが早いのは椎名健……シータケだな」

飴を舐めながら幸せそうな顔をする健を思い出しながら言う。

「五年生の時だったかな、ヤツが俺の通っていた学校に転校してきた。シータケは誰の話も真面目に聞かないし、授業中も抜け出すようなヤツだった。……いや、今でもそうか。とにかくシータケは最初こそ気に留められていたが、そんなヤツだから次第に誰も声をかけなくなった。

まあ、俺は最初から話しかけようとしなかったが、ふとしたきっかけがあってアイツと話すようになったんだ」

「ほうほう、昔からそんな感じだったんですね。で、きっかけって何か？」

「飴」

「はい？」

「だから、飴」

「あのお空から降り注ぐ天然のシャワー……」

「酸っぱい方の飴じゃなくて、甘い方の飴」

「酸性雨とかけたんすか……面白いですね」

「なら笑えよ」

「……自分、不器用なんで」

「何で急に人と接するのが苦手な相撲取りっぽくなってるんだよ」

「で、きっかけが飴ってどういうことですか？」

「急に話を戻すなよ。……まあ、飴って言うか、キュービィ。アップだったな。……あ、キュービィ。アップって分かるか？」

「ええと、小さい立方体の飴っすよね。小包装に二種類のフルーツ味の飴が入った」

「そうだ。あれは遠足の日だったな。当然のごとくあぶれたシートケは偶然俺らの班に入ることになったんだ。で、当日。どこに行ったかとかは忘れたが……昼食の時だった。シートケはキュービィ。アップをおやつに持ってきていた。それは良い。だがな、アイツは信じられない食べ方をしたんだ」

「……と言いますと？」

「一粒ずつ食べたんだよ。信じられるか？」

「はあ……はい？」

深有は頷きかけて、首を傾げた。

「だから、二粒入りのキュービィ。アップをいっぺんに口に入れず一粒ずつ舐めやがったんだ」

「それで……？」

深有はとりあえず頷いて先を促すことしかできない。

「ムカついたから喧嘩を吹っかけた」

「大人気なっ！」

「そら子どもだからな」

「ってか、小さいっすよ先輩、器が」

「あの頃はやんちゃだったんだよ」

「……それで、どうなったんすか？ お前なかなかやるな。お前こそ。って感じすか？」

「いや、喧嘩が終わった後、俺はキュービィ。ツプを二粒舐めることによって生まれるシンフォニーの素晴らしさをヤツに説明したんだ。初めは半信半疑だったシータケも試しに二粒舐めてみた。……ヤツはシンフォニーの虜になった」

「最早意味が分からないっす……」

「アイツは言った。僕は今まで一袋に同じ味が二粒入ったものを楽しみにしていた。でも、今知った。アレは邪道だと。あつてはならない存在だと。」

そして、俺らは友達……いや、同志になった」

「前後がまるで繋がらないっす、先輩。ってか同志で。キュービィ。ツプから生まれる同志で……」

「シータケとはそれ以来の仲だ。シータケは飴好きだったから俺はたまにアイツに飴をやったら、知らない内に何か懐かれてた」

「完全に餌付けしてますね、先輩。すげえっす」

「たまにキュービィ。ツプって二つくつついてるのあるよな。あんな感じで、俺らも仲良くなったんだよ」

「今日一番の意味不明な発言いただきました。……って言うか、まさか、華秋さんの場合もそんな感じなんすか？」

「んー、和奏は氷で俺が手って感じだな。乾いた手で触ったら剥がれなくなるんだけど、水で濡らせばあっさり剥がれる関係。」

そもそも、和奏と出会ったのは……」

「どうかしましたか？」

「あ、いや。そっちは秘密にしとくわ」

「そんなご無体な……」

「ま、きつかけなんて大したものじゃなくてもさ、あの二人だって人間なんだ。そりゃあ、親しい相手がいてもおかしくないだろ」

「そうですかねえ。先輩が特別だからな気がしますけど……」

「人間関係に特別も何もねえよ。そういうのは、遠慮せずに一歩踏

み出せばいくらでも広がるもんだって」

「……それも、また才能ってね」

輝の耳にも微かに聞こえるくらい小さな声で、深有は呟いた。

「？ 何か言ったか？」

「いえ、何でもありません。ってか、先輩めちゃくちゃ耳良くないっすか？」

「……やっぱ何か言ったんじゃないか」

「おっと、失言でしたね。なに、先輩を素直にお褒めするのが恥ずかしいだけっす」

「……良く分からないけど、ありがとう、と言っておけば良いのか？」

のらりくらりとやり過ごす深有に、輝は少しだけ首を捻りながら通学路を歩いた。

その後、輝が瑞希とも話す姿を深有に見られ、再びその出会いを問われるのはまた別の話だ。

アンサンブル

景悠学園には、学年共通の選択授業というものがある。

書道。美術。音楽。家庭科。茶道。選択肢はそれなりにある。学園生はの中から一つ選び、クラス混合で授業を受ける決まりになっていた。

一番人気なのは、家庭科。次いで、物珍しさからか茶道。

そして、一番不人気なのは音楽だった。

この授業が不人気な理由は、参加した生徒は自作の曲を作ってそれを演奏しなければ、赤点扱いになってしまうためだ。

当然、そのような難しい講義を選択する生徒は、吹奏楽部に入っていたり、小さいころにピアノを習っていたりする人がほとんどで、他は…… よつぽどの物好きだ。

そんなよつぽどの物好きが、この教室には割と多くいたりする。

椎名健、華秋和奏、風流瑞希、そして久遠輝。人の目を引くような雰囲気を持ち主であり、孤高な存在。明らかに“浮いている”四人の姿がそこにはあった。

「今日から本格的に楽曲制作に入っていただきます」

異様な空気の漂う教室で、教師が前に立ち授業の説明をしていた。「一人一曲でなくても構いません。もちろん、一人でも良いですが、誰かが曲の軸となる物を作り、何人かで各パートのアレンジして合奏することも認めます。一人でやるか何人かでやるかは基本的に自由です。とにかくこの授業では最終的にその演奏の得意によって成績を評価しますので、それだけは覚えて取り組んでください。」

ピアノは話し合いで時間を区切って使用するように。それでは作

業を始めてください」

その言葉に生徒は三々五々に作業を始める。とはいっても作曲にそこまで自信がない人、一人で演奏して発表することが恥ずかしい人、というのが大半だ。多くの人が何人かで班を作り、合奏形態の曲を作るうとしているようだった。

「さて、どうするよ？」

出遅れたけど、と輝は隣の和奏に話を振った。

「どうもこうも、あまりこういうのは得意ではありません。やれと言われれば、できないこともあります……風流さんは？」

「あたしも作曲とかはできないわね……と言うか、こんなことをしなきゃいけないって知っていたら、間違いなくこの授業は選択してなかったわ。椎名は？」

瑞希が健に尋ねた。彼にしては珍しく、和奏や瑞希を特別無視することは無いようで、その問いにも素直に答える。

「んー、僕は楽器ならできるけど、曲を作るのはちよつとなー」

「なるほど。期限はいつまでだっけ？」

「一か月後が発表です。この授業は週に二回ですから、今日も含めてあと十回ですね」

「決して長くはないわね」

どうやら一人一曲とか言っている場合ではないかもしれない。このままでは全員落第だ。

「ま、あたしは適当に何とかするわ」

「私もそうさせていただきます」

「僕も」

「……………」

輝は思わず頭を抱えた。この三人には協調性というものはないのだろうか。普通そこは「じゃあ、一緒にやらない？」「うん、良いよー」の流れだろう。

「……まあ良いか」

幸い、輝は作曲の経験がある。困ることはないだろう。

この三人がどうするのかも気になるが、無理に干渉するべきではない。輝はそういった距離の保ち方は心得ていた。

「ちよつと、そこどいてくれる？」

不意に席の後ろからハスキーな声が聞こえて、四人は振り返った。そこにはウッドベースがあつた。最近のウッドベースは人語を話す……わけではない。人の大きさ近くあるウッドベースの陰に隠れて、誰か運び手がいるのだろう。

四人は席を立ちあがり、机と椅子をどかした。

「悪いわね。手伝うわ」

瑞希がそう言い、ウッドベースに手をかける。

「……ありがとう」

横に回り込み、二人で運ぶ。

「ここで良いわよ」

指示された場所でウッドベースを下ろすと、反対側から女子生徒が現れ、礼を言った。

「風流さんだっけ？　もしかしてあの人達と一緒にやるの？」

「いえ、別にそういうわけでは」

移動させた机の上に座っている三人を見、瑞希は首を横に振った。「そうなの？　自覚ないかもしれないけれど、あなた達ってこのクラスで浮いてるわよ」

正面切つて言われるとは思わず、瑞希は肩を竦めるだけに留めた。「椎名なんていつもボーっとしてるし、華秋さんは……何でもできそうだけど、妙に人を見下すような態度だし、久遠は何か暴力的だし……」

ねえ、風流さん、良かったら私達の班に入らない？　私達、ジャズの曲をやるうと思ってるんだけど、今三人しかいないからパートがどうしても足りなくて……あなたなら入れてあげても良いかなって」

入れてあげる、ときたものだ。どっちが人を見下しているのだからと瑞希は内心鼻で笑い飛ばしたくなる。

和奏とは数日前、健とはこの授業で、どちらも輝を通して知り合ったばかりなので強くは言い返せないが、こんな風に陰口を叩かれて黙ってられるほど瑞希は優しくはなかった。……というか、正直に言うとお腹立たしかった。

「お誘いは嬉しいけれど、あたしやつぱりあの三人と一緒にやるから。ごめんなさいね」

「……え、でも、さっきは……」

「ええ、そうよ。だって、たった今決めたんだから」

「で、でもっ、あんな人達となんかより私達の方が……大体、彼らがロクな曲が作れるわけがないじゃないっ」

まさか断られるとは思っていなかったらしく、明らかな動揺を浮かべ女子生徒が食い下がってきた。

「曲の良し悪しなんて作ってみなければ分からないわ」

「ふざけないで、私達は吹奏楽部なのよっ」

「だから何？ 彼らよりも実績がある？ それとどこかの大会で賞でも取った？……ああ、吹奏楽部が出るコンクールとかって出場者全員が銅賞を貰えるんだっけ？」

「あなた……っ！」

「言わせてもらえば……大きなお世話よ。他人の評価なんて馬鹿らしい。あたしは、あたしのやりたいようにやる。望まないお仲間ごっこに頭下げて入れてもらうなんてのは、こっちから願ひ下げ」

顔を赤くする女子生徒にそう言い捨て、瑞希は踵を返した。

「ぜ、絶対に後悔させてやる！ そこまで言ったからには覚悟しなさいよ！ 格の違いを見せてあげるわ！」

背後から何かが聞こえてくるが、その声はもう瑞希の意識に入ってなかった。

思考を巡らせながら瑞希は三人の下へ向かう。問題は、あの一癖も二癖もある連中をいかにして説得し、四人で曲を作るかということにあるのだから。

「良いんじゃないか？ もともと俺も四人でやれば、と思っていたし」

「私は別に構いません」

「僕もどつちでも大丈夫だよ」

瑞希の予想に反し、三人は合同での曲作りにあっさりと賛成をした。

「本当に、良いの？」

「良いつての。それよりパート決めるか」

「僕はドラム！」

輝の言葉に、健が真っ先に反応した。それに和奏が続く。

「私はピアノなら少しだけ」

「あたしは……」

と、そこで瑞希は言葉を詰まらせた。実を言うと、瑞希は楽器の類を演奏することは得意ではないのだ。小学校の頃に鍵盤ハーモニカやリコーダーを授業で多少齧った程度で、五線譜も読めなければリズム感があるわけでもない。

「特に希望がないのなら、ベースを頼んでも良いか？」

そんな瑞希の様子を察してか、輝が提案した。

「……弦楽器なんて触ったこともないわよ」

「それでも良いさ。一か月もあればそこそこは弾けるようになる。分からないことがあったら教えるし」

「それなら……分かったわ」

むしろこの場合はスタート地点がゼロの楽器の方が良い、と輝は考えたのかもしれない。瑞希は甘んじてその情けを受けることにした。

「で、輝。あんたは何をやるの？」

「編成的にギターかな。あと、曲作りは俺に任せてくれないか？」

「あんたが……できるの？」

「ああ、まあ一応。全員のパートの土台になる楽譜を次回までに作

って来るよ。ダメそうだったら、また考え直せば良いし」

「……じゃあ、お願いするわ」

「和奏とシートケもそれで良いか？」

「異論はないです」

「うん。良いよ」

和奏も健も賛成し、方向性があつさりと決まる。

あまりにも話が都合良く進み、瑞希は肩透かしを食らった気分になる。

しかし、やる気だけは削がれていなかった。——きっかけはどうあれ、一度やると決めたからには全力で。それが瑞希のモットーだった。

闘志は燃える。

静かに。しかし、強く。

空は気まぐれ

一週間後の音楽の授業、宣言通り輝は楽譜を作ってきていた。「楽器がなかったからデモ音源も何もなくて悪いんだけど」と、前置きをして輝はギターを弾き始める。

「――」

演奏を終え、小さく息を吐く。

「……これって、何かのパクリとかじゃないわよね？」

瑞希が戸惑いがちに言った。

「まさか。作曲、久遠輝だ」

肩を竦めてそう言い、輝は各パートの注意点を健と和奏に説明した。

それを終えると今度は瑞希に向き直る。

「瑞希は楽器買ったんだっけ？」

「ええ、まあ一応」

「じゃあ、俺が教えるよ。二人は個人で練習できるよな？」

和奏と健は頷くと、時折手や足を動かしながら楽譜を食い入るように見つめ始める。楽器に触る前に曲のイメージを掴む作業だ。

輝はさして気にも留めず、二人から離れた場所に移動した。

「どうした？ 瑞希？」

促され、瑞希はベースの入ったケースを抱えながら輝のもとに向かう。

「あんだ、本当に音楽の経験あったのね」

「向こうでそれなりにな。鏡界の久遠輝はそうでもなかったみたいで、家に楽器の一つもなかったけど。」

ま、そんなわけでちょっとズルかもしれないけど、これは向こうで作った曲」

「ふーん。何、曲なんて作って、プロでも目指していたの？」

「いや、目指していたって言うか、プロだった」

「はいい？」

瑞希はあやうくベースを取り落しそうになった。

「プロだった、ってあんた……」

「そこそこ売れてたんだぜ？ この不況の中でもCD出せばとりあえず生活に困らない金を稼げるくらいには」

「……確かに、素人が作る曲にしてはあまりに“整いすぎている”

上に、ギターもやたら上手だと思っただけど……本業だったとは。：

…何か、あんたには驚かされてばかりだわ」

瑞希が額に手を当て、首を振った。顔を上げる。

「もしかして進学しなかったのって、それが理由？」

「ああ、そうそう。鏡界に来て勉強面でこんなに苦労するはめになるなら、向こうでも行つとけば良かったな」

「忙しかったらそんなことも言ってられないでしょ」

「まあ、そうなんだけど。そのプロって言うか、音楽で飯を食っていた時代ってのは学園で言うならば一年の時だけなんだ。実際、二年生になる頃にはただのフリーターだったから」

「じゃあ、音楽はやめたってこと？」

「ああ、色々あってな。そう言えば、シータケも当時は俺と一緒にバンドを組んでいたんだ。小さい体のくせにパワフルに、そしてリ正確なりズムで演奏をするドラマーだった。つまり、あいつも現界ではプロのミュージシャンってことだな」

「……椎名とあんたにそんな繋がりがあったのね。って言うか、そんな連中と一緒にやるからにはあたしも下手な演奏できないじゃないかい」

「ま、あくまで現界での話だからあまり気にしなくても良いさ。時間はあるし、できるだけルート音だけで演奏できるようにしといたから、大丈夫だろ。さ、練習するか」

ムスツとした調子で言う瑞希を窺め、輝は授業時間一杯まで瑞希

にベースの基礎を叩き込んだ。

「そんなことがあったんすか……」

放課後、瑞希に教則本を買って渡そうと思っていた輝は、バイトに向かう深有と偶然出会い本屋までの道を共にしていた。その際に近況を聞かれたので音楽の授業について軽く事情を話したところ、その反応だった。

「華秋先輩に椎名先輩、風流先輩に久遠先輩とは……また豪華なメンバーが揃いましたねえ」

「豪華ってほどでもないと思うが……」

「こう言っちゃなんですが、よく纏まっていますよね……揉めたりしないんすか？」

「いや、とりあえず今は、班のメンバーをあらかじめ指定されているグループワークみたいな感じだからな。みんな必要以上には干渉せず自分勝手にやってるさ」

「纏まっては、いないんですね」

「無理に気を遣うよりは数倍居心地が良いだろ」

「なるほど、それは分かるような気がします。知らない人ばかりの班で、上辺だけの態度で付き合うのも疲れますし。逆に無駄に知り合いばかりいて、班の中でまた区切りを作ってその仲間内だけ馴れ合うのも何か違いますしね」

「グループワーク、ってのも考え物だよな。将来役に立つんだかなんだか知らないけど、好きなようにやらしてもらいたって俺は思う」

「自分はまあ、色んな人の性格とか、この人はこう考えているんだなってのを知る機会と思って割り切ってますがね」

「確かにそれが一番かな。ま、それはさて置き、暫くは個人練習だ。今くらいの纏まり具合でちょうど良いさ」

「そうですね。頑張ってください。陰ながら応援してます」

「ああ。……ん、あれは……」

とその時、視界に見知った人影が映り、輝は足を止めた。

「シータケ……あいつ何してやがるんだ……」

健が道端で座り込み地面を見つめていた。端から見ると、不審者の一歩手前だ。

輝は健の傍に寄り、声をかける。

「シータケ、おい何やってるんだ？」

「……………」

「おい、シータケ」

「……反応しないっすね。って言うか何を見ているんでしょうか？」
付いてきた深有が健の目線の先を覗き込んで、そう言った。

「放っておいても良いんだけど、雨が降りそうだし注意しとくか」
健の性格からして雨が降ったくらいでは観察を止めないだろう。
そう思い、輝はポケットを探った。

「お、ついに出了ましたね、最終兵器」

「……飴玉が兵器になった戦争を逆に見てみたいとすら思う」

「はい？ 戦争なんてあるわけないじゃないですか」

「……そう言えばそうだった」

危ないところだった。うっかりしているとここが戦争のない世界だということを忘れてしまいそうだ。

輝は飴玉を取り出し、半開きになっていた健の口に放り込んだ。

「……はうあ！」

素っ頓狂な声を上げて、健の体がピクリと小さく跳ねた。

「輝じゃん。いきなりどうしたの？ ううん、それはどうでも良いや。この味な〜に？」

「期間限定、さくらんぼ味だ」

「ちよつと酸っぱいかも〜」

「でも好きだろ？」

「うん〜。今はこんな気分」

「で、何してたんだ？」

「ん、アリを見てた」

「そうか。俺も日頃からアリはなかなかデキるヤツだと思っているぞ。何せ、俺よりもよっぽど働いている。」

まあ、熱中するのは良いけど、雨が降りそうだからキリの良いところで帰れよ」

「分かつら。ほうする」

飴を舐めながら舌足らずな調子で、健が言った。

輝もそれ以上何かを言う気はないらしく、それきり別れそうな空気になった時、

「あの。椎名先輩」

「ん？」

再びアリに目を向けようとした健に、深有が声をかけていた。

「初めまして。自分、萩原深有って言います」

「ふん。そ」

健は深有の瞳をまじまじと見つめた後、興味なさげに顔を逸らしアリへと視線を戻した。

「あの……」

「……」

「あのー、椎名先輩？」

「深有、やめとけ。残念ながら、シータケとお前は合わないみたいだ」

「……でもっ。できればお話をしたいといいますが、ええとですね……！」

淡泊な性格だと思っていた深有が、何故だか今回はやや混乱気味に食い下がる。その熱意に押され、輝は仲介を試みることにした。

「あー、シータケ」

「何？」

輝の言葉にはしっかりと反応する健に、深有が何とも言えない表情を浮かべた。

「自己紹介した相手にはなるべく返事をした方が良いと思うぞ」

「ん、その子に興味ないし、別にどうでも良い」

「……すまん、やっぱ無理かも」

輝の言葉に、深有が体を乗り出す。

「どこが、どこがいけないんですか、椎名先輩？ 自分が久遠先輩みたいじゃないからですか？ 言ってくれば自分は……」

「うーん、その子、人の調子を窺っているみたいで嫌い」

「……っ！」

初対面の相手に容赦のない言葉。その上、あくまで輝を介しての会話。つまり、健には深有を相手にする気がさらさらないということだ。

「はい、そこまでだ。シータケはアリの観察に戻ってくれ。深有はもう行くぞ。バイトがあるんだろ」

「ん」

「……そうでした」

両者が答える。輝と深有はその場を後にした。

「……何か、お恥ずかしいところをお見せしてすみません」

「気にするな。俺は気にしてない」

そう答えながらも、深有は人の調子を窺っている、という健の言葉が結構的を射ているかもしれないと輝はぼんやりと考えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9901w/>

Hide-and-Seek

2011年11月10日03時18分発行